

クソザコナメクジに



は 難 し い

はい、スプラッターハウス終わったしいよいよ 3D を作っていきましょう。

内容

概要	3
スケルトン	3
3D 事始め	6
とにかく表示だ	6
きんのたま	6
謎の現象	7
事前知識	7
Zバッファ(深度バッファ(デプスバッファ))	8
カメラ(視点、注視点、視線ベクトル...そして上)	13
スクリーンと画角と視錐台	15
モデルを読み込んで表示	17
とりあえず読み込んで表示	17
回転します	20
移動します	20
アニメーションさせます	21
あれ?	23
ともかく動かそう	24
ちなみにループ再生についてですが	25
クソノ重い	25
非同期読み込み	26

ちなみに床は…	27
暗いんでしれっとライティング設定	27
Cube オブジェクトを作る	28
まずは三角ポリゴン1枚を表示してみる	28
用語	29
頂点情報を設定する	31
三角形を回転しよう	32
平行移動もしてみよう	33
法線も回転	34
三角形→四角形	34
四角形→立方体	36
一例	36
アンビエントとマテリアル	39
閑話①	43
コーディングは『アホ』と仕事するつもりで	43
俺的コーディング規約?	43
C++コーディングガイドライン	44
転がしてみよう	45
行列を考えよう	47
移動行列	47
リファクタリングしよう①	50
クラス設計	50
モデル読み込ストレスを減らす ModelLoader の簡易版を作ろう	51
閑話②	54
ドローコールは極力減らそう(でも極端にはならないように)	54
ゲームルール部分を作っていこう	55
ルール	56
マルチスレッドの強い味方	59

概要

ぼくは正直者だから『簡単』とは言いません。言いませんが、DxLib を使っていますので、それほど難しくもないと思います。

今回参考にするゲームは Intelligent Cube...I.Q です。



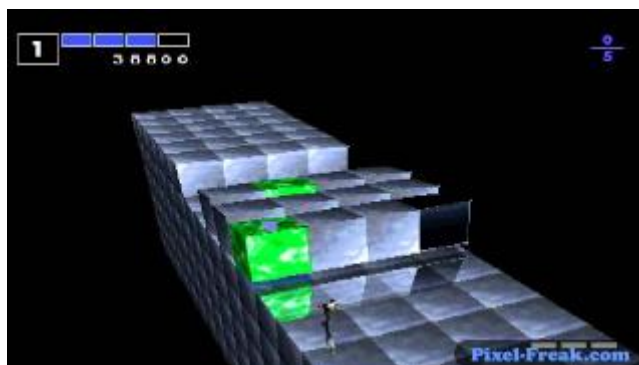
知ってる人は少ないんじゃないかな...

動画を見てみましょう。

<https://www.youtube.com/watch?v=BzM9kTGfeko>

こういうやつです。

PS1 の時代のゲームのくせにしれっと生意気にも反射とか使ったりしてなかなかの良ゲームなのですよね。



おそらく、作ること自体にそれほど時間はかからないし、スプラッターハウスが無事習得できているみんなにとっては…詰まることも少ないのではないのでしょうか？

スケルトン

まずスケルトン的なのをさっさと作りましょう。

```
#include "Game.h"
```

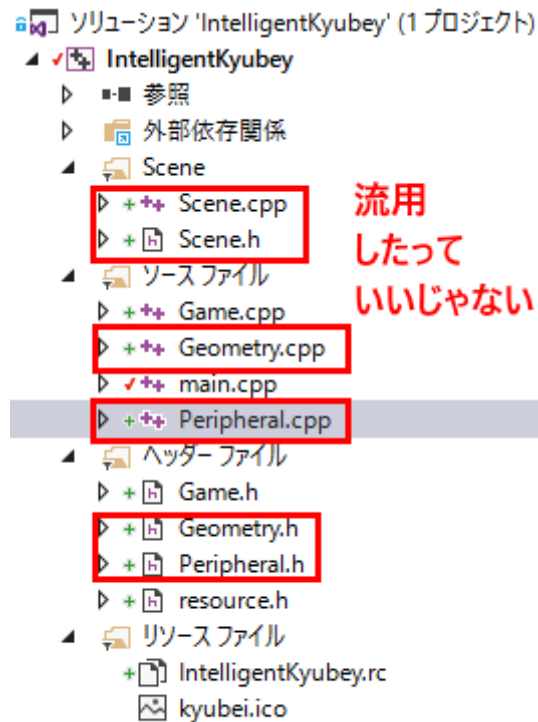
```
int main() {  
    Game& game = Game::Instance();  
    game.Initialize();  
    game.Run();  
    game.Terminate();  
}
```

エントリポイント作りの

```
class Game {  
private:  
    Game();  
    Game(const Game&);  
    void operator=(const Game&);  
public:  
    ~Game();  
  
    //インスタンスを返す  
    static Game& Instance() {  
        static Game instance;  
        return instance;  
    }  
  
    //初期化とかやるんやで  
    void Initialize();  
  
    //実際のゲームループを動かすんやで?  
    void Run();  
  
    //終了時の後処理をするんやで?  
    void Terminate();  
};
```

Game クラス作りの

その他一部(Geometry クラス,Scene クラス)はスプラッターハウスから流用しーの



トツギーノ



ひとまずここまでやってみましょう

前のプログラムを一部流用してもいいし、見ながらやってもいいし、流用しなくてもいいし、作り方を变えてもいいので、まずはタイトル画面を出しましょう。

ちなみに今回の画面サイズは 1280,720 とします。

3D 事始め

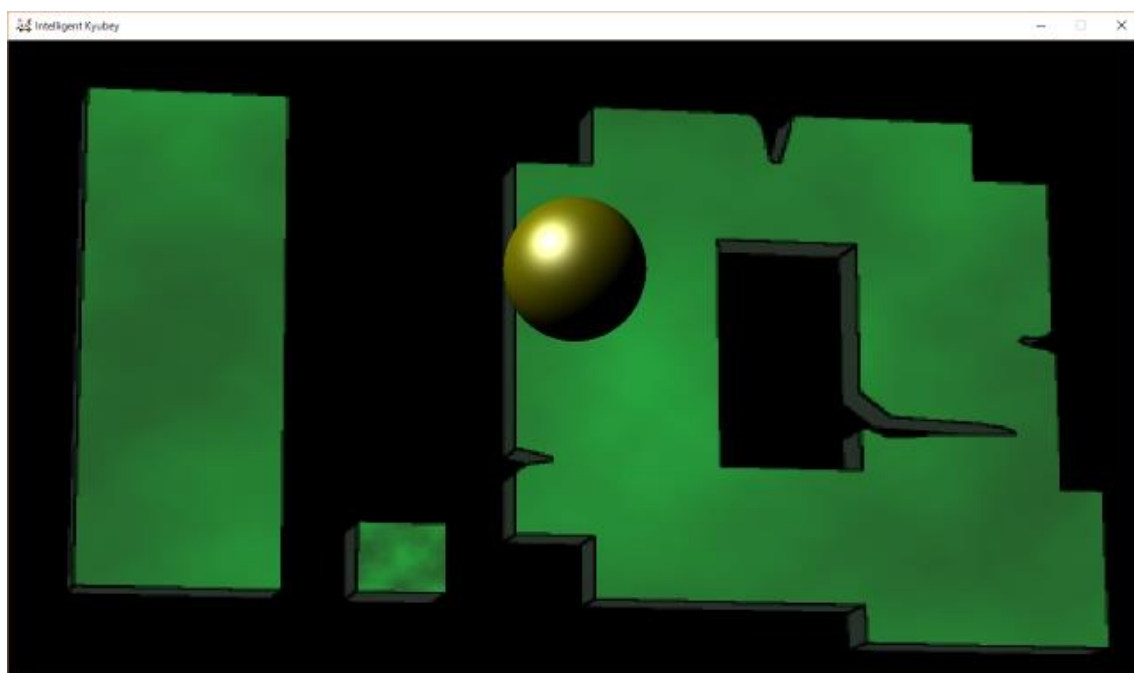
とにかく表示だ

きんのたま

とりあえず金の玉を表示してみましょう。こんな感じで記述してください。

```
DxLib::DrawExtendGraph(0, 0, wsize.w, wsize.h, _titleH, false);
```

```
DxLib::DrawSphere3D(VGet(wsize.w / 2, wsize.h / 2+100, 0), 80.0f, 36, GetColor(128, 128, 0), GetColor(255, 255, 255), true);
```



こんな感じになるかと思います。

おおー!!3D だー!!!

って、あんまり感動はしないか。大した話じゃないしね。最後の引数を true->false にすると球体がワイヤーフレーム表示になります。

ちなみに、原因は良く分からないのですが、この球体を画面中央に置くと表示が妙な事になります。

まあ、恐らくは Z バッファが無効になってるんだけど… とりあえず球体の座標を

`ysize.w / 2, ysize.h / 2, 0`

にしてみましたから試すと

謎の現象…



こうなります。

球体の下半分がおかしなことになってるのに気づきますね？

3D というのは厄介な事が多いのです。厄介な物事に対処するには事前にある程度仕組みを知っておく必要があります。

という事で、3D に必須の知識をちょっと触れておきましょう。ほんの初歩をちょっとね？
あっ…(察し)ふーん。

事前知識

3D のプログラミングをするには、例えそれが `DxLib` を使っていたとしても、言語とは別に特有の基礎知識が必要となります。大変だろう？ワクワクするだろう？基礎知識がないと↑の原因すら全く分からないのだ!!!

基礎知識があってもピンとは来ないかもしれない。だが基礎知識がなければこれに対応するのはほぼ不可能です。

というわけでいくつかの用語を解説しておきます。なおこれは多分後期でも言いますがこの Google 先生時代においては『用語』がかなりの『力』を持ちます。いわゆる『検索力』につながります。

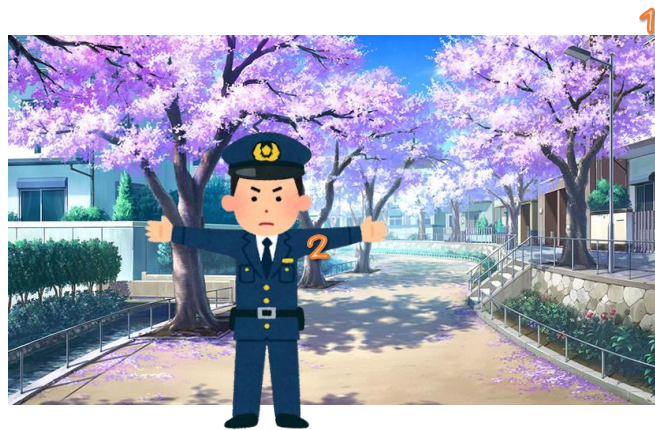
Google 先生のおかげで1から 10 までを完璧に頭に入れておく必要はなくなりましたが、迅速に答えを得るためには自分の技術に関連する『用語』はしっかり押さえとけて事だよ。

2 バッファ(深度/バッファ(デプス/バッファ))

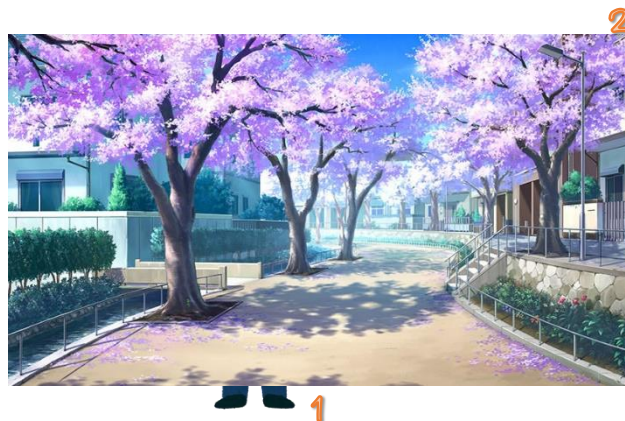
ひとまず↑の現象を解消するために必要な概念です。これを知ってないとまずさっきのを治すことはできません。

2D のゲームであっても『描画順序』が大事な事は分かりますね？

例えば

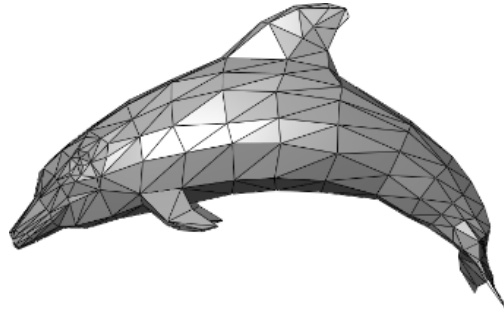


背景→警官の順番に描画すればこの場合、警官がちゃんと表示されますが、これが逆なら



こうなる。これは分かりますよね？

だから描画の順序が大切なんです。で3D モデルと言うやつは無数の三角形の集合体でできている事は何となく知っていますね？

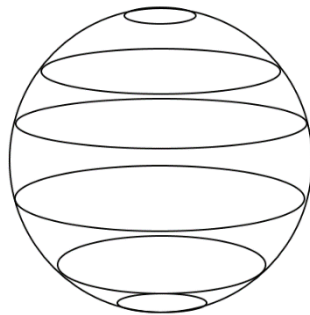


こういうやつね？

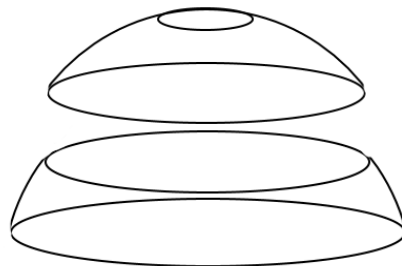
で、この三角形も前後の順序を間違えると向こう側が見えちゃったりするわけですよ。イルカくんの胃袋も心臓も肝臓も腸も見えちゃうわけですよ。

で、今回の例ではどうなってるのかと言うと、DrawSphereのポリゴンの描画順は恐らく上から下に(そして奥から手前に)書いているものと思われます。

書き方としては、



このような球体を輪切りにしたものを積み重ねて球体になっていると考えられます。



こんな感じに積み重ねているわけですね？

で、上の段を描画した後、下の段を描画したとします。そうすると、下の段の裏側が上の段の表側の後に描画されることになり、先ほどのような変な模様が出るというわけです。

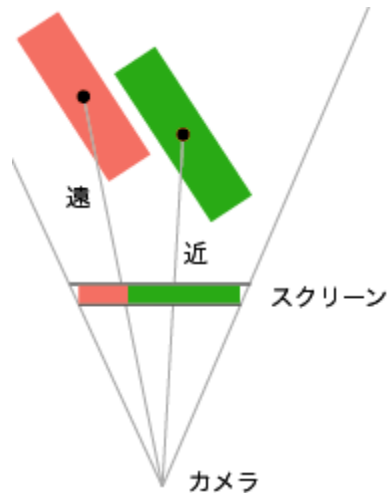


なんとなく原理は分かりましたね？3Dというのは面倒な事だらけなのです。

そこで考え出されたのが『Zソート法』というやつです。ポリゴンそれぞれのZ値(視点からの距離)を計算し、それによってポリゴンをソートするというものです。

それで向こう側にあるポリゴンから塗りつぶしを行って最後に一番手前にあるポリゴンを描画することで解決していたのです…

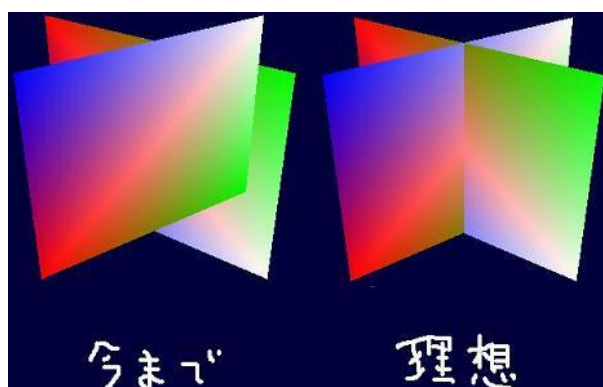
しばらくはその時代が続きました……。ただ、その当時から問題点は指摘されていて…



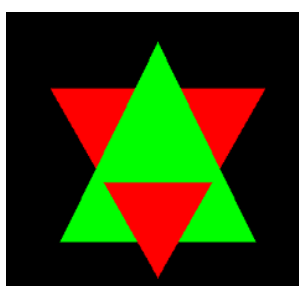
こういう位置関係だったとする。『比較されるポリゴンの座標』っていうのが、ポリゴンの頂点の座標の平均から割り出しているので、上の図のようなおかしいことが発生します。

また、それ以外にも『突き抜け』問題があつて…

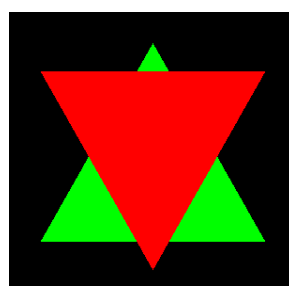
ポリゴン同士が奥行き方向にクロス、もしくは突き抜けていたりするともっとえげつない問題が発生します。



このように見た目の位置関係が全然違って見えるわけです。



理想



現実

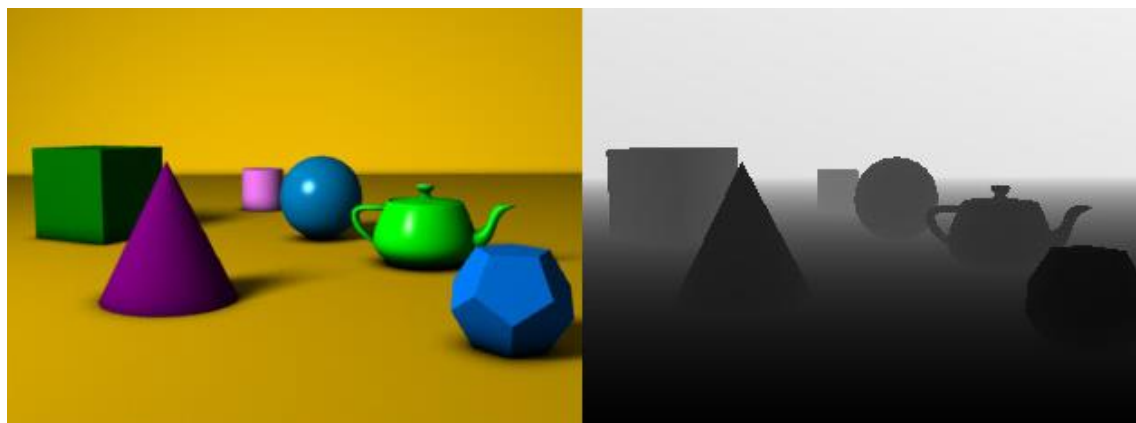
こういう事ですね。

とりあえず、こういう問題がある事は知っておいてくださいね？で、出てきた解決法が

「全ピクセル判定対象にすれば全部解決じゃね？」

という豪快な解決法であり、現在も使用されている解決法です。

やり方は簡単。Zバッファ(深度バッファ)という、『カメラからの距離を記録するバッファ』を用意します。と言っても良く分からないだろうから図で見せると…



左が実際のオブジェクト配置(=そしてレンダリングされるであろう画像)

そして、右が『Z 値(深度値)』を画像として表現したものです。正確に言うと後述する『クリッピングボリューム(視錐台)』と非常に密接に関わっているのですが、とりあえず今は

「カメラにフツノ近い」所を 0。 カメラからフツノ遠い」所を 1 とする」

というルールで Z 値が記録されていると思ってください(厳密にいうとこの理解だと不正確です)。基本的にはその事を深度値と言い、depth という値で表します。

この値を輝度としてレンダリングしたのが、さっきの画像の右側です。視点から近い方が暗く、遠い方が明るくなっているだろう？

こんなものが何の役に立つのかというと、ピクセルごとに『そのピクセルを今塗りつぶすべきか』を判断する手助けになります。

どういう事かというと、ピクセルをそのオブジェクトの色で塗りつぶすには、そのピクセルにおいて、そのオブジェクトが一番手前に(一番カメラに近く)ある必要があります。

これに関しては大丈夫ですよ？後ろにある奴の色で塗りつぶされても困りますからね。

で、どうやって行くのかというとピクセルごとの Z 値を記録していくんですが、先に記録されている側が手前で、今から記録しようとする側が奥にある…つまり Z 値が

今から塗りつぶそうとする Z 値 > 既に塗りつぶされた Z 値

であれば、描画もしないし、Z 値も更新しないわけです。

今から塗りつぶそうとする Z 値 < 既に塗りつぶされた Z 値

であれば、新しい色に塗りつぶし、Z 値も更新します。そうするとどうでしょう。座標的に手前にあるピクセルは描画され、奥にあるのは描画もされず無視されるし Z 値も書き込まれない。

結果として、最も手前にあるピクセルだけが残る

という事になります。そういう形で描画順序によらずにオブジェクトを描画する方法がZバッファ法(深度バッファ法)です。

ちなみに DxLib ではこのZバッファを有効にするフラグとZバッファに書き込むフラグがデフォルトで OFF になっています。ON するには

```
DxLib::SetUseZBuffer3D(true);  
DxLib::SetWriteZBuffer3D(true);
```

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R14N12

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R14N13

とします。基本的にはこれは両方とも true にすべきですが、場合によってはこれを OFF にしたい場合もあります。たぶん 2 年生の今の知識だけでは分からないと思いますので、現在の所は、両方 true にしておいてください。

カメラ(視点、注視点、視線ベクトル…そして上)

次にカメラの概念を話します。さっきも『カメラからの距離』なんて言い方をしましたね。カメラの座標と言うのは視点の座標であり、3D 空間上のどこかに設定します。

ぶっちゃけた話、カメラがないと 3D では物を 3D っぽく表示できません。ちよつとここで用語を言っておくと

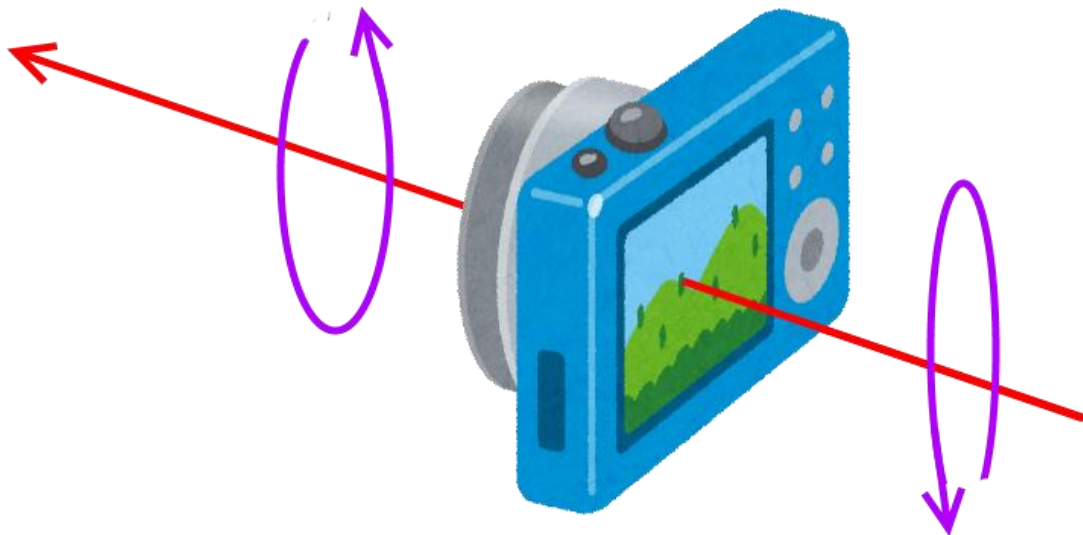


カメラは『視点』と言って、カメラが中心として写す被写体(点)を『注視点』と言います。そして、視点から注視点に向かうベクトルを『視線ベクトル』と言います。

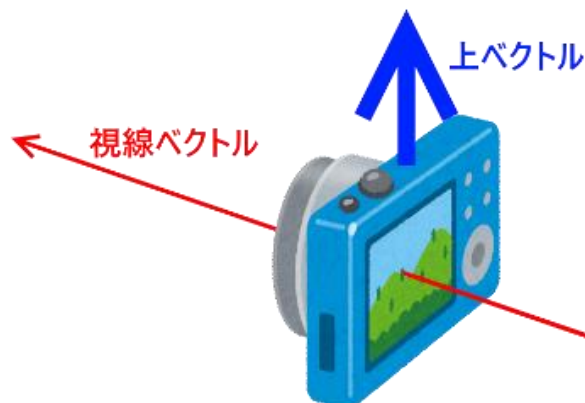


さあこの三つの概念があればカメラはOKだと思いますか？思うかもしれませんが。しれませんがちょっと待ってください。視線ベクトルだけでは不十分です。何故なら軸が一つだからです。3D空間上で軸が一つではいけないのです。

何故なら…



軸が一つでは図のようにどちらが上だか下だか定まらずに、くるんくるんくるん回転してしまうのです。重力があるとかいう事に気づきませんが、宇宙空間に放り出されたら、どちらが上も下もないでしょう？そんな状態になるのです。これはまずいという事で必要なベクトルがアッパーベクトル…つまり『上』ベクトルです。



これでカメラの向きが初めて固定されます。

なお、この視線ベクトルと上ベクトルを外積してさらに外積して、カメラから見た XYZ 座標系と言うのを作って、カメラ座標系と言ったりします。

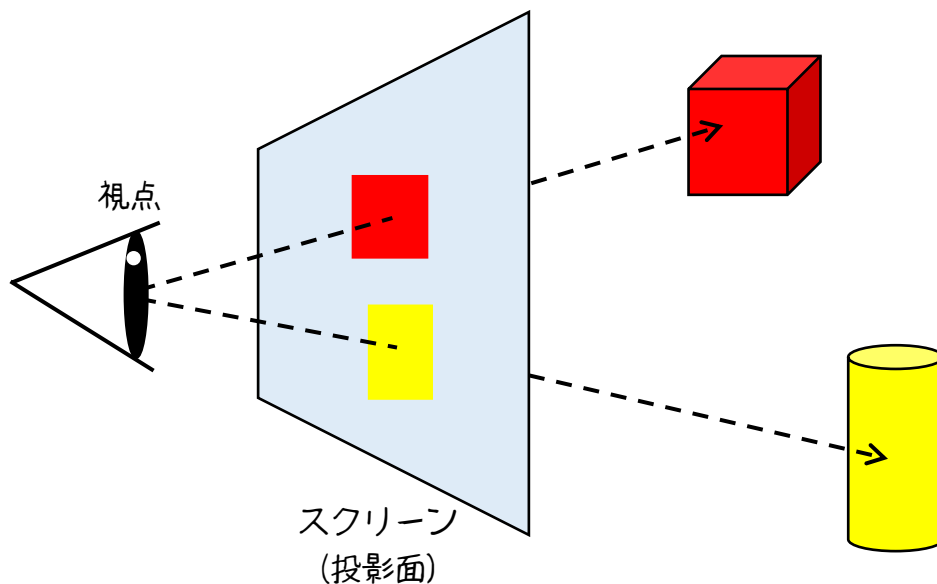
ややこしいですね…その話はとりあえず置いておいて次行きましょう。

スクリーンと画角と視錐台

ところでここで問題があります。

先ほども述べたようにカメラはあくまでも『視点』であるため、これを定義しただけでは目に映るすべての物は点に集約されてしまいます。これでは何も見えない。

というわけで視点から適度に離れた場所に『投影』したものを実際のゲームの画面に表示する必要があります。

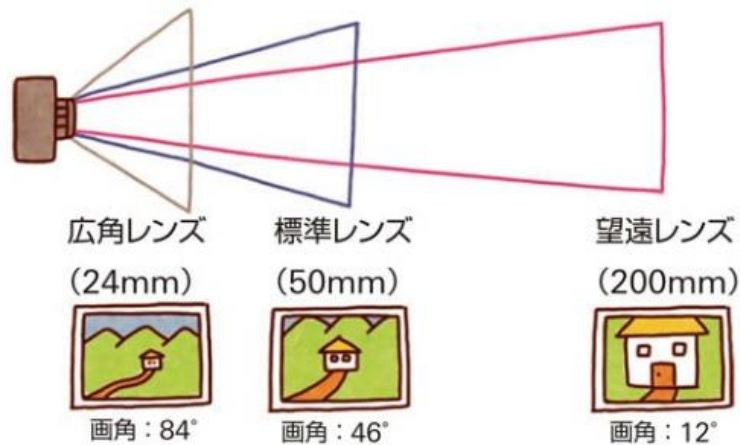


というわけで、視点とスクリーンの位置は一緒ではないのでちょっとややこしい…注意しましょう。

で、上の図で見て分かるように視線は遠くに行けば行くほど広がります。もっと見える範囲が広がっていきます。そして見える範囲が広がるという事はそれをスクリーンの範囲内に収めるためには、視界の中に入る物体の大きさは遠ければ遠いほど小さくなる必要がありますね？

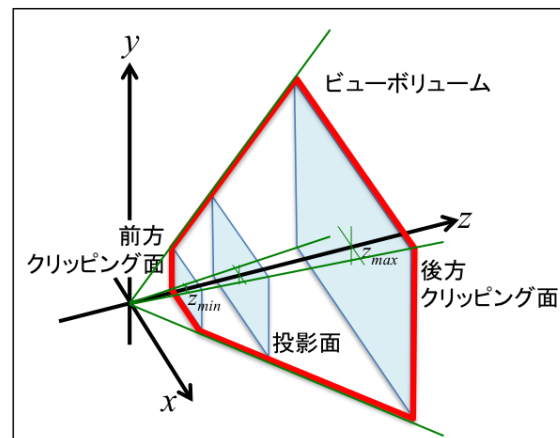
いわゆる遠近法と言うやつです。

カメラは「**画角**」と言って、見える範囲を広げるか狭めるかを角度で表します。これもまた専門用語かもしれませんが、画角が狭いと望遠レンズに。画角が広いと広角レンズになります。



広角は広い範囲を収めるために、遠くのものゝ極端に小さくなってしまふため見える距離は短くなります。逆に望遠レンズは見える範囲は狭まりますが、遠くまで見えるようになります。

さて、CG の話に戻しますが、いくら望遠レンズといえども永遠の距離まで計算してはいつまで経っても計算が終わりません。という事で CG では近い方と遠い方にレンタリングする範囲を限定します。もちろん上下左右も限定しますのでレンタリングする範囲は



立体的に図の範囲内に限定されます

この範囲の事を「**ビューボリューム**」「**クリッピングボリューム**」「**視錐台**」と言ったりします。ちなみに前方クリッピング面をニアクリップ。広報クリッピング面をファークリップと言います。near(近い)と far(遠い)ですね。

一応 3D 的な台形の形をしているので『視錐台』と呼んでいます。

とりあえず、初歩の初歩の基本中の基本の知識をお話ししました。早速ゲーム作りに励んでいきましょう。

モデルを読み込んで表示

金玉なんて表示しても面白くもなんともないので、せっかくだから可愛いモデルを読み込んで表示したいですね？

とりあえず読み込んで表示

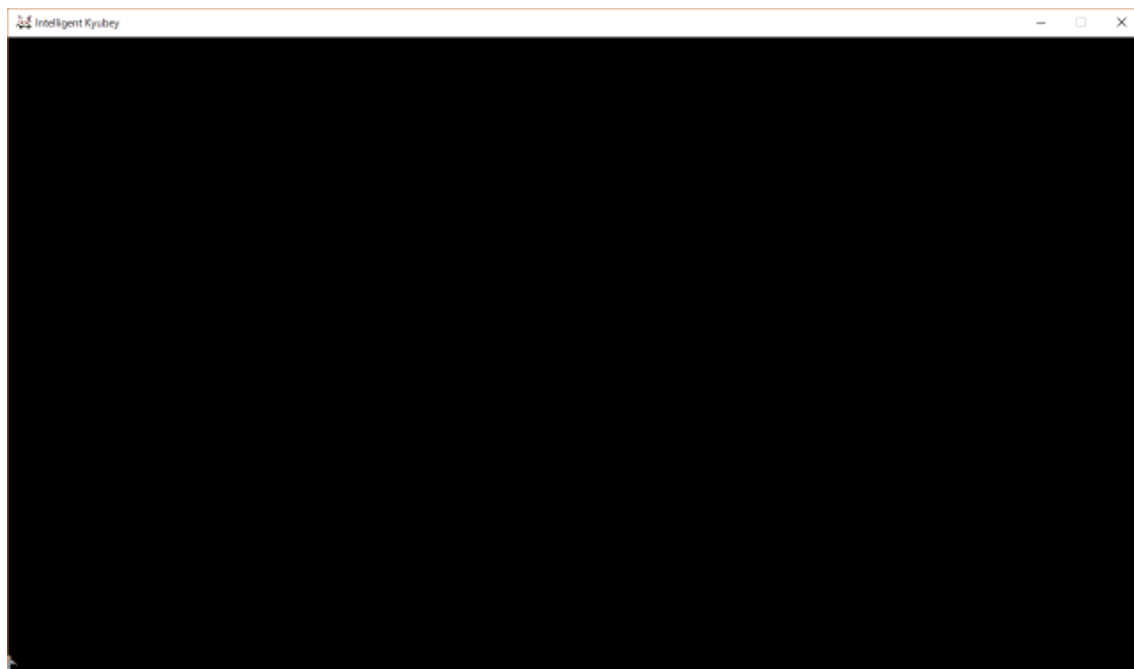
読み込むには `MV1LoadModel` という関数を使います。

http://dxcib.o.o07.jp/function/dxfunc_3d.html#R1N1

そして表示するには `MV1DrawModel` という関数を使います。

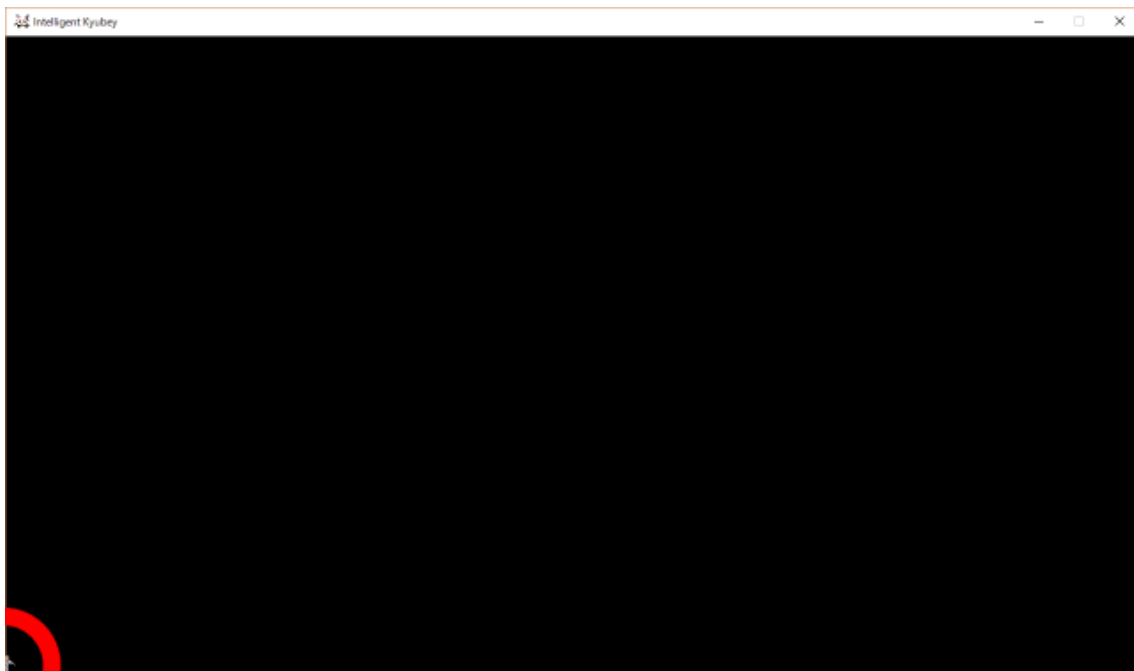
http://dxcib.o.o07.jp/function/dxfunc_3d.html#R2N1

これがバグなくできてればこうなります。

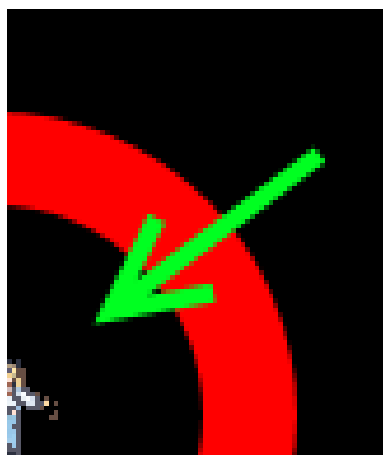


あれ？出てねーじゃん？

いやいや…よく見るがいいよ。



左下を見てください。



アッー!!

どうやら表示はされているようだ…
非常に見落としやすいので注意してください。

…そもそもどうしてデフォルトをこんなに使いづらい状況にしているのか、そこに対してはいまだに疑問が残るのだけれども…

とにかく先に原因を言っておこう。カメラだ。

カメラという概念について一応解説はしたが、DxLibは優しすぎるため、カメラのために特別な設定しなくても3Dの表示はできるようになっています。

今回もそうでしょうか？特にカメラの設定はしてませんよね？

ですがご覧のような結果になっており、ぶっちゃけ使い物にはなりません。デフォルト設定なんて所詮そんなもんです。

ちなみに本来であれば画面中央に出るべきものなのですが、何の気を遣いやがったのか左下が(0,0)になるように設定されています。というわけで、3D の一般的なカメラ設定をしましょう。

視点が(0,15,-25)

注視点が(0,10,0)

画角は 60°

ニアとファールは…0.5~300.0 くらいにしましょうか。

カメラその他の設定は

```
SetCameraPositionAndTarget_UpVecY( VECTOR Position, VECTOR Target );
```

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R12N2

```
SetupCamera_Perspective( float Fov )
```

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R12N6

```
SetCameraNearFar( float Near, float Far );
```

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R12N1

で行えます。うまいこと設定できてれば



モデルが表示されます。

回転します

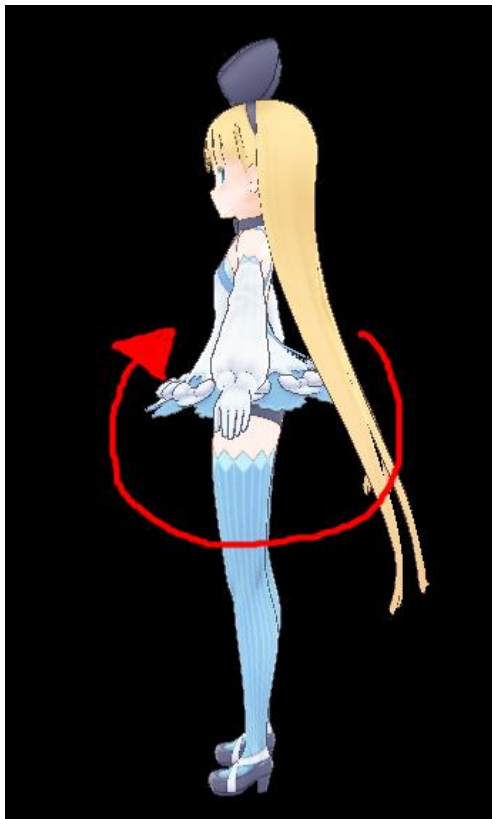
舐めまわすように眺めるために回転させます。

`MV1SetRotationXYZ`

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R3N6

この関数は軸と回転量を指定することで回転します。

あ、ちなみに VGet 関数で DxLib::VECTOR 型を作ることができます。ご利用ください。



くるくるとね

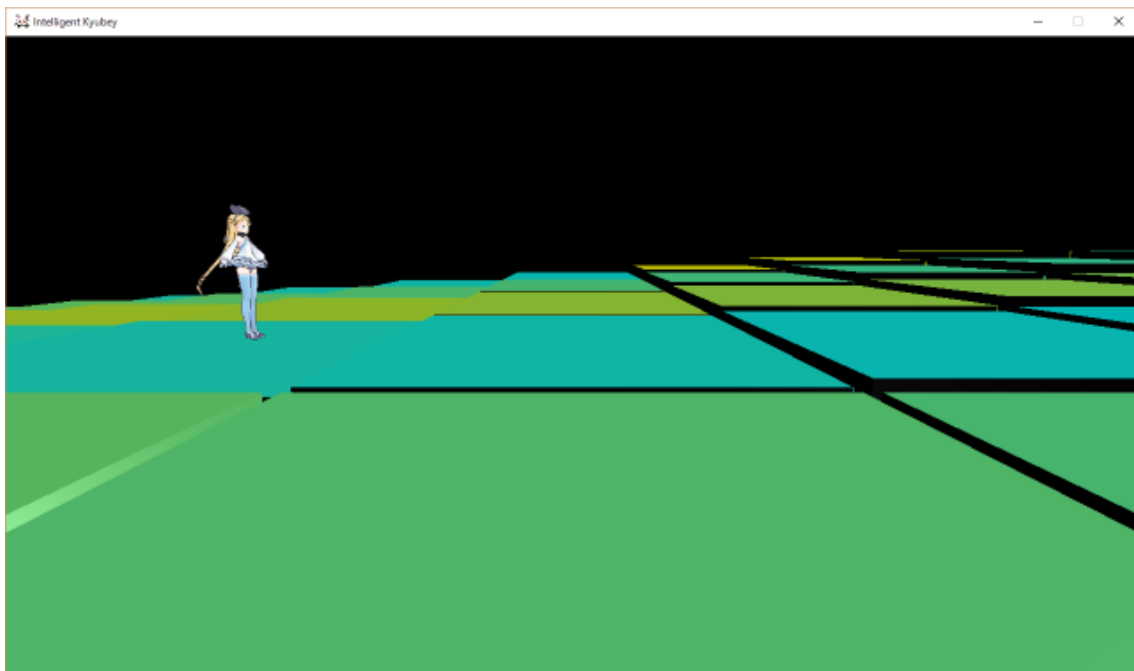
移動します

パッドの上下左右で(左右奥前)と動くように。更に言うと動いている方向に顔が向くようにして動かしてください。

ちなみに平行移動というか、座標の設定は `MV1SetPosition` という関数を使用します。

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R3N2

うまいことやれば



このように 3D 空間上をあちこち移動できます。

ちなみに地面は DrawCube3D という関数で描画してます。

していますがちょっとだけ…言っておくと、この DrawCube3D は実際のゲームにおいてはほぼ
使い物になりません。なぜかという、この立方体…回転ができません。そういう仕様です。た
ぶんデバッグ用なんじゃないかと思います。

ともかく 3D 空間上でキャラを移動させてください。

アニメーションさせます

いつまでも同じポーズでは面白くありませんね。
アニメーションさせたいと思います。

アニメーションさせるにはまず MV1LoadModel を読み直しましょう？

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R1N1

『MikuMikuDance ではトゥーン用のテクスチャ(toon01.bmp 等)はモデルファイル(pmd or pmx)が存在するテク
スチャとは別のフォルダにあって問題なく読み込むことが出来ますが、DXライブラリではトゥーン用の
テクスチャもモデルファイル(pmd or pmx)と同じフォルダに格納しておく必要があります。(トゥーン用のデフ
ォルトテクスチャは MikuMikuDance の Data フォルダの中にあります)

また、DXライブラリでは MMD のモデルファイル形式(pmd or pmx)とモーションファイル形式(vmd)の読み込みに対応していますが、モーションファイル(vmd)はモデルファイル(pmd or pmx)を読み込む際に一緒に読み込まれるようになっています。

ただ、MV1LoadModel にはモーションファイルのファイル名を渡す引数はありませんので、次のようなルールでモデルファイル(pmd or pmx)用のモーションファイルを検索します。

1.モデルファイル名に3桁の番号がついたモーションファイルがあるか検索して、あったら読み込む

(検索する番号は 000 から)

例えば、Miku.pmd(若しくは Miku.pmx) というファイル名を FileName として渡した場合は、最初に Miku000.vmd というモーションファイルが存在するか調べます。

2.検索する番号を 000 から順に1つつ増やしていき、存在しないファイル名になるまで読み込む

例えば、Miku000.vmd、Miku001.vmd、Miku002.vmd と数字の繋がった3つのモーションファイルがあった場合は3つとも読み込まれます。

仮に Miku000.vmd、Miku001.vmd、Miku005.vmd のように、番号が途切れていたら、Miku000.vmd と Miku001.vmd の二つだけ読み込まれ、Miku005.vmd は読み込まれません。

尚、読み込み時にIK計算を行いますので、x ファイルや mv1 ファイルに比べて読み込み時間が非常に長くなっています。

<ループ再生するモーションについて>

モーションの中には歩きや走りといったループさせて再生を行う用途のモーションがあると思います。

そのようなモーションの vmd ファイルは、<読み込みについて>の解説にあったファイル名の付け方にある 3桁のモーションの番号の最後に半角の L をつけてください。」

…ということです。

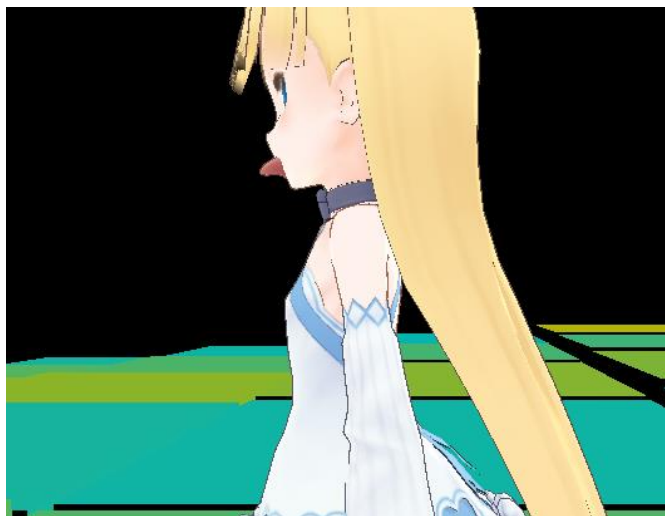
まとめて言うと

- PMD のモーションファイルは vmd という拡張子
- モデルが X.pmd であれば、モーションは X000.vmd～X999.vmd のような名前

- ループモーションは X000L.vmd のように最後に L を付ける事このくらいです。
大したことはないです。

とりあえず今回は
000L をニュートラル,001L を歩きモーションとします。

あれ？



ニコニ立体ちゃん…あれ？

非常にかわいいニコニ立体ちゃんなのですが、アニメーションさせようとする何故かベロが出ます。それはそれでかわいいのですが、ひっこめられないのでちょっと間抜けです。一応 DxLib の注意書きでも

読み込むことのできるモデルファイル形式は x,mqo,mv1,pmd(+vmd),pmx(+vmd) の4種類です。
(但し,pmx は pmd 相当の機能だけを使用していた場合のみ正常に読み込める仮対応状態です)

という事は、こういう不具合が起きても仕方ないという事が…。ちなみに僕の一番使いたいモデル『キズナアイ』は、ロードすらできませんでした…OTL。

ちょっとクソムカついたわあ……それなら、こうだ!!!



そしてこのキャラである

ともかく動かそう

動かすためにはDxLibではひとまず『アタッチ』が必要になります。アタッチとは再生したいアニメーションを指定することです。アニメーションに関しては既にモデルごと読み込んでおりますので、番号を指定するだけです。今回の『歩き』モーションは1番なので1番を指定しましょう。

```
_attach=DxLib::MV1AttachAnim(_playermodelH, 1);
```

これだけで動かないんですが、ポーズが歩きモーションのフレーム目状態になっています。

さて、これを動かしていくためには

MV1SetAttachAnimTime

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R4N3

これの第3引数の『アタッチ時間』を少しずつ進めていけば動いてくれます。1は1秒…ではなく1フレームという意味なのですが、ここがちょっと曲者で、MMDの1フレームは30分の1秒なんですよね。

通常ゲームは60fpsですが、MMDは30fpsなので、毎フレーム+1すると早すぎるのです。なので

```
_frameTime+=0.5f;
```

などのように調整してあげる必要があります。とりあえずこれでアニメーションできていれ

ばオッケーです。

ちなみにループ再生についてですが

モーションにLをつけたら勝手にループしてくれるとでも思った？

残念!!!こいつは物理演算用でしたーっ!!!

という事で、ループ対応は自前で行わなければなりません。ループ対応…ループ再生とはそもそも何ぞや？

自分でしばらく考えてみよう。

そう、最後まで進ったら最初に帰ってくるようにすればいいんですね？そして最終フレームと言うのも自動で判断してくれるわけではないっぽいです。じゃあどうするのかというと『縦再生時間』を得る関数

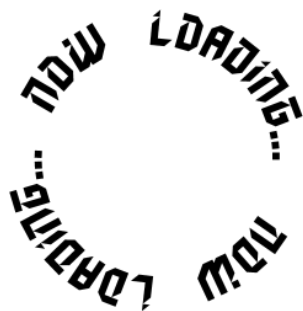
```
float MV1GetAttachAnimTotalTime( int MHandle, int AttachIndex );
```

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R4N5

を使用して『縦再生時間』を取得。これを越えたら_frameTime を 0 に戻すような処理を行えばループになるというわけです。

クッソ重い…

モデル自体は大した重さではないのですが、IK のベイクがそれなりに時間がかかってる…ので、読み込みが重いんですよね…。というわけで NOWLOADING を出しましょう。



ロード画面の例

ちなみにこの重さは単純に IK 計算の重さなので、Release にするとちよつとは改善されると思います。

また、この NOWLOADING はローディング中はくるくると回るようにしましょう。一応コンシュー

マゲームの制作のチェックリスト項目のひとつに

「処理は1フシたりとも止めてはいけません」

というのがあったりします。無茶言うな。流石にこいつは努力目標ではあるんですが、各プラットフォームでほぼ共通の明確なルールがあって

「1秒以上、画面更新が止まってもはいけません」

というのがあります。これはゲームセンター時代からそうなのですが、1秒以上画面の更新が行われないと、ハードウェアとかドライバとかいうのが『あっ、これ故障だ』と見なしてシャットダウンしちゃうんですよ。これをウォッチドッグというのですが、面倒な仕様なのです。なので、画面を止めないようにしたいと思います。

非同期読み込み

DxLib ではこれは簡単で…

```
SetUseAsyncLoadFlag(true);
```

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_other.html#R21N1

SetUseAsyncLoadFlag を true にすると非同期読み込みになります。3D でも同様です。関数自体は即時復帰ですが、読み込みが終わり次第描画されます。

ただし、読み込み中はアタッチも何も、メッシュに対する操作を受け付けないので、モデルロード処理が終わってからアニメーション適用をしなければならないわけです。

つまり終わるタイミングを知りたい。読み込み終了タイミングを知るには

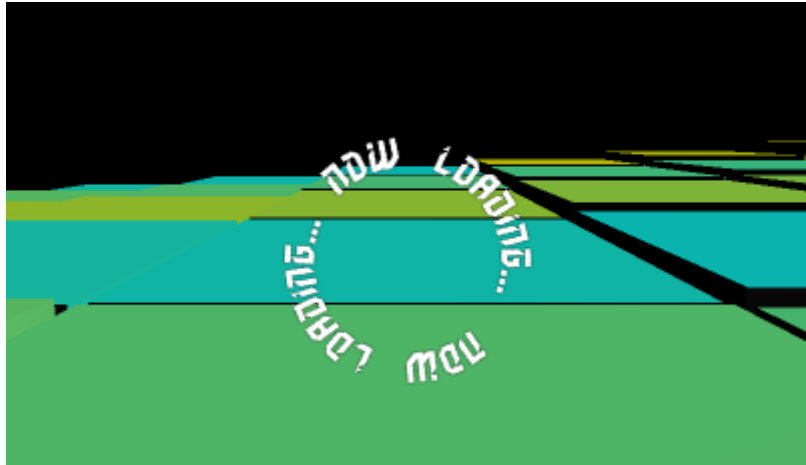
[CheckHandleAsyncLoad](#)

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_other.html#R21N2

を使用するといいでしょ。

引数にハンドルを渡して関数をコールすると、現在のロードスレッドの対象となるモデルが読み込み完了したら true。まだなら読み続ける…そして読み続けている間は NOWLOADING を表示する。

という具合で良いと思います。うまい事行けば、ロードするまでローディング画面が表示されているという状態になります。



コツと言うか、手順としては、ゲームシーン開始の時点で非同期読み込みを開始して、ローディングアイコンを回転させつつフェードイン。読み込みが終わらなければローディング画面のまま。終わればメインのアップデート(状態)に切り替えてモデル表示。

この切り替えるタイミングで、アタッチを行えばうまくいくと思います。

ちなみに床は…

Cube 形状を作るのは意外と大変だったりするので、実は床に関しては今の所 DrawCube3D という関数で描画しています。デフォだと

暗いので、しれっとライティング設定

あまりここでやる気はなかったんですが、ちょっと床の色がアレすぎるので仮にライトの設定をしておきます。

ライトをオンにした状態で…

```
SetUseLighting(true);
```

```
SetLightEnable(true);
```

ライトの方向及び属性を設定

```
SetLightDirection(VGet(1.0f, 1.0f, 1.0f));
```

```
SetLightDifColor(GetColorF(0.8f, 0.8f, 0.8f, 1.0f));
```

```
SetLightAmbColor(GetColorF(0.4f, 0.4f, 0.4f, 1.0f));
```

```
SetLightSpCColor(GetColorF(1.0f, 1.0f, 1.0f, 1.0f));
```

ちょっと詳しくは書かないが、平行光線ベクトルと、ディフューズ、アンビエント、スペキュラーを設定している。実はアンビエントは『マテリアル』を設定しないとほぼ意味がないのだが、それはもう少し後で設定することにしよう

Cube オブジェクトを作る

現在表示している Cube は DrawCube3D で描画しているのですが、こいつは回転もできないし IQ に使うには力不足である。

で、外部から立方体を読み込んでもいいのだが色分けとかはプログラマブルにできた方がいいと思いますし、頂点情報を作るのもまあいい勉強だと思いますので、三角形の集合体として Cube クラスを作っていきます。

```
#pragma once
class Cube
{
public:
    Cube();
    ~Cube();
    void Update();
    void Draw();
};
```

まずは三角ポリゴン 1 枚を表示してみる

現在の所 DirectX だろうが OpenGL だろうが 3D の物体は全て三角形の集合体として表現されます。

そういうわけで三角ポリゴンを 1 枚表示するところからやってみましょう。

当然ながら 3 つの頂点情報が必要です。描画を行うには

DrawPolygon3D

http://dxlib.o.o07.jp/function/dxfunc_3d.html#R14N7

という関数を使用します。実はこれはのちに DrawPolygonIndexed3D にする予定なのですが、ちょっと概念がややこしいので、まずは三角形を表示しましょう。

マニュアルによれば頂点情報は VERTEX3D という構造体であり

// 3D 描画に使用する頂点データ型

```
struct VERTEX3D
{
    // 座標
    VECTOR pos ;//12bytes

    // 法線
    VECTOR norm ; //12bytes
```

```

// ディフューズカラー
COLOR_U8 dif ; //4bytes
// スペキュラカラー
COLOR_U8 spc ; //4bytes
// テクスチャ座標
float u, v ; //8bytes
// サブテクスチャ座標
float su, sv ; //8bytes
};

```

という定義がされています。非常に情報量が多いですね。なのでぶっちゃけ頂点数は少ない方がいい。1 頂点当たり 48 バイトですね。たいていのフォーマットはこれ以上なのでしゃあないと思いますわ。

用語

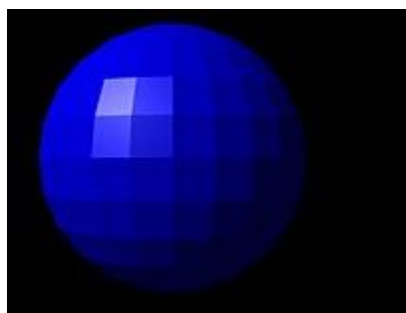
またけったいな用語が出てきたのに気づいておりますでしょうか？

まず法線…ここでは法線ベクトルの事です。聞いたことくらいはあると思いますが、

法線ベクトル⇔面に垂直なベクトル

の事です。

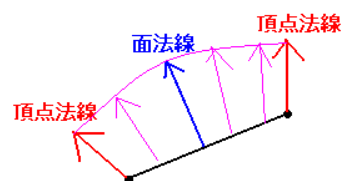
あれ？面に垂直なのになんで頂点情報なの？と思った人もいるかもしれませんが、基本的に法線情報ってのは頂点を持っています。本来は『面』であるのは確かに正しいのですが、スムーズシェーディングと言って、面にグラデーションをかけて滑らかにするには頂点にあった方が都合が良いのです。



面法線



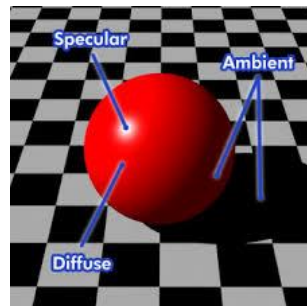
頂点法線



ただ、今回のように立方体を作るときはちょっと不向きなのですが…まあ、全モデルのうち角ばってる方が少ないんじゃないかなと思うので、現状では頂点法線が採用されてると思ってください。

あ、この法線ベクトルが何に使用されるのかというと、物体表面の明るさを決めるのに使用されています。おおざっぱに言うと、法線ベクトルと光線ベクトルの内積が明るさに対応していると思ってください。なので、何はななくとも内積は復習しておくように!!!

次にディフューズ(拡散反射成分)とスペキュラー(鏡面反射成分)ですが、こいつらは先ほどの明るさにかかる係数みたいに思っておいてください。なお、ディフューズはぼやとした明るさの変化で、スペキュラーはキュンとした明るさの変化に対応します。



なお、↑の図にはスペキュラとディフューズに加えて、アンビエント(環境光)というのがありますが、こいつはスペキュラ&ディフューズのみだと真っ暗(真っ黒)になってしまうので、下駄を履かせる意味でついていると思ってください。

古典的なシェーディングの式ではこのディフューズ、スペキュラー、アンビエントが物体の明るさを決める三大要素になっています。

次の『テクスチャ』はお判りでしょうが、UV って何でしょうね？UV ってのはテクスチャをポリゴンに張り付けるための目印となる数値です。頂点と絵のどこを対応させるのかというのを 2D 座標で設定する…そういうものです。DxLib の説明だと

『頂点のテクスチャ座標です。画像の左上端を $u=0.0f$ $v=0.0f$ 右下端を $u=1.0f$ $v=1.0f$ とした座標で指定します。』だそうです。

最後のサブテクスチャは今の所使用しないそうですので、無視してください。

ちなみにテクスチャについて、DxLib における注意点を一つ…

『GrHandle で指定する画像は 8 以上の 2 の n 乗のピクセルサイズ(8, 16, 32, 64, 128, 256, 512, 1024 …)である必要があります(使える画像サイズの限界はハードウェアが扱えるサイズの限界

ですので、2048 以上のピクセルサイズは避けた方が良いでしょう)」
だそうです…マジか。3D めんどくせーな。

頂点情報を設定する

で、頂点情報を設定しようとして気づいたのですが、うーん。DXLib の『モデル以外の回転』とかって、面倒…というか、CPU 側でやるんだね…GPU 側にやらせたければシェータ書かなきゃいけないんだね。シェータは 2 年生にはまだ早い気もするし…うーん。

いやさ、DX9 とかだったらシェータ使わなくても頂点に対して SetWorldMatrix 的な関数で回転行列投げてやれば GPU 側で回転してたんだけど、DXLib はモデルに対してしかそういう機能を公開していないっぽい…仕方ないなあ…CPU 側でやるか。

どうやら VTransform で各頂点を動かせという事らしい。掲示板における DXLib の管理人のサンプルコードを見ると…

// 行列を使ってワールド座標を算出

```
Vertex( 0 ).pos = VTransform( VGet( -100.0f, 100.0f, 0.0f ), TransformMatrix );  
Vertex( 1 ).pos = VTransform( VGet( 100.0f, 100.0f, 0.0f ), TransformMatrix );  
Vertex( 2 ).pos = VTransform( VGet( -100.0f, -100.0f, 0.0f ), TransformMatrix );  
Vertex( 3 ).pos = VTransform( VGet( 100.0f, -100.0f, 0.0f ), TransformMatrix );
```

<http://dxlib.o.oo7.jp/cgi/patiobbs/patio.cgi?mode=past&no=2749>

マジか…クソめんどー。正直嫌すぎるとしか…。

まあ文句言っても仕方ないので…やろう!!!

頂点の情報は

頂点座標、法線、ディフューズ色、スペキュラ色、UV、ゴミ
となっておりますので、三角形を作るならば

VERTEX3D v(3) = {

```
{ VGet(0,10,0),VGet(0,0,-1),GetColorU8(255,255,255,255),GetColorU8(255,255,255,255),0.0f,0.0f,0.0f,0.0f },  
{ VGet(2,10-4,0),VGet(0,0,-1),GetColorU8(255,255,255,255),GetColorU8(255,255,255,255),1.0f,0.0f,0.0f,0.0f },  
{ VGet(-2,10-4,0),VGet(0,0,-1),GetColorU8(255,255,255,255),GetColorU8(255,255,255,255),1.0f,1.0f,0.0f,0.0f } };
```

のように3頂点を定義して

void

```
Cube::Draw() {
    DxLib::DrawPolygon3D(v, 1, gH, false);
}
```

のようにドローします。うまくいけば…



うまいこと三角形が表示されます

三角形を回転しよう

はい、三角形を回転させてみます。Y 軸回転させてみましょう。

ちなみに `MV1SetRotationXYZ` はモデルに対しての関数なので使えません(MV1 と先頭についている関数はモデルに対しての関数だと思ってください)

それなら、どうやって回転させるのか？

それはですね…すべての頂点の座標を回転させるのです。回転には行列を用いる必要があります。

回転行列を返す関数は色々あるのですが、今回は Y 軸回転をさせましょう。関数は

`MATRIX MGetRotY(float YAxisRotate);`

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R11N18

です。

で、MATRIX ってのが行列です。これで取得した MATRIX 型の行列を VTransform で頂点に適用します。

`VECTOR VTransform(VECTOR InV, MATRIX InM);`

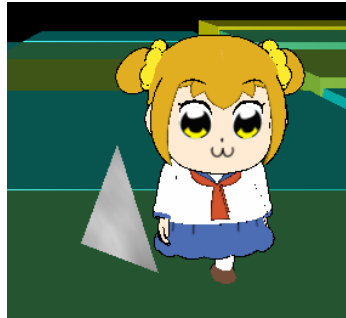
http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R11N12

つまり

```
v=VTransform(inv,MGetRotY(angle));
```

これで回転後の頂点座標が得られますので、この回転後の頂点情報を DrawPolygon3D に放り込んであげればいいのです。

そうすれば



このように三角ポリゴンも回転します

平行移動もしてみよう

画面中心から少しずらした状態で平行移動をしてみましょう。回転はそのまま続けつつ。
平行移動の関数は MGetTranslate

さて、平行移動と回転と…2つ組み合わせるにはどうすればいいのでしょうか？

数学の時間にやったはずなのですが…分かりますか？

そう…行列同士を乗算するんですよね。ちなみに DxDlib では行列の*オペレータは搭載されておきませんので MMult 関数を使用してください。行列同士の乗算を表します。

MGetTranslate

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R11N16

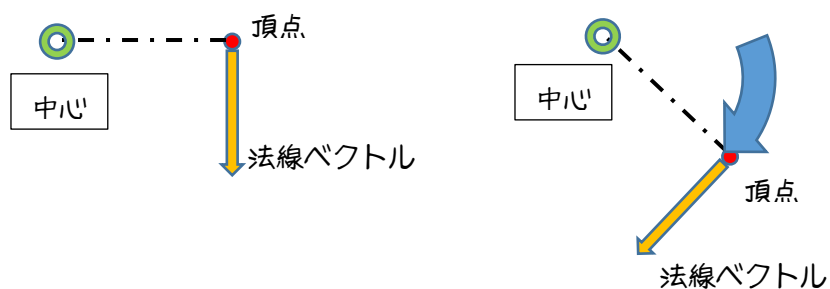
MMult

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R11N25

うまくいけば、中心から離れた場所で回転します。うまくいっている人は試しに MMult 関数の2つの引数を入れ替えて挙動の違いを確認してください。数学の時間に『行列は乗算の順序を間違えないようにしようね』と言った意味が分かりますと思います。

法線も回転

実は 3D 的に陰影をつけるのであれば、頂点が回転した時に法線も一緒に回転しないと不自然な事になりますので、法線も回転する必要があります。



ただし、法線には平行移動成分をかけてはいけません。平行移動成分を抜くには 4x4 行列のうち、左上から 3x3 行列だけをかけてやればよく、そのための関数も用意されており

VTransformSR

http://d3lib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R11N13

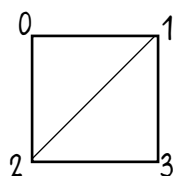
です。その結果



こんな風に明暗がついていれば OK です

三角形→四角形

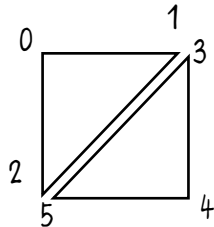
三角形を四角形にします。ただ、ここで DrawIndexedPolygon3D に切り替えます。何故かと言うと本来



このように4頂点で済むはずの情報が実際には6頂点情報となってしまう、データの無駄だからです。こうすると、4頂点情報+インデクス情報6つで、一見情報が増えているようですが、1頂点当たり 48 バイトなので $6 \times 48 > 4 \times 48 + 6 \times 4$ となります (288 > 216)。数が増えれば増える

ほどこれは顕著です。

ちなみにインデックスデータは配列のインデックス(添え字)情報で三角形ができていくよう



に並べていきます。↑の例で言うと

{0,1,2,1,3,2}というわけです。一応のルールとして周り方向(右回り,左回り)は統一しておいた方がいので、こうしています。

例えば

```
const float ed_w = 5.0f;
```

```
VERTEX3D inv(4) = {  
    { VGet(-ed_w,ed_w,-ed_w),VGet(0,0,-  
1),GetColorU8(255,255,255,255),GetColorU8(255,255,255,255),0.0f,0.0f,0.0f,0.0f },  
    { VGet(ed_w,ed_w,-ed_w),VGet(0,0,-  
1),GetColorU8(255,255,255,255),GetColorU8(255,255,255,255),1.0f,0.0f,0.0f,0.0f },  
    { VGet(-ed_w,-ed_w,-ed_w),VGet(0,0,-  
1),GetColorU8(255,255,255,255),GetColorU8(255,255,255,255),0.0f,1.0f,0.0f,0.0f },  
    { VGet(ed_w,-ed_w,-ed_w), VGet(0, 0, -1), GetColorU8(255, 255, 255, 255),  
GetColorU8(255, 255, 255, 255), 1.0f, 1.0f, 0.0f, 0.0f } };
```

```
unsigned short indices(6) = { 0,1,2,1,3,2 };
```

こんな感じに頂点とインデックスを定義しておき

```
DxLib::DrawPolygonIndexed3D(v, 4, indices,2,gH, false);
```

こんな感じで描画すれば…



このように正方形が表示できることでしょう
ここまでができたならより 3D らしく、立方体を作っていきます。

四角形→立方体

さて、ここからは自分で考えて立方体を作ってください。なあと…立方体は 6 面だから同じものを向きを変えて 6 面つくればいいだけです。

- 点の数は 24 個(6x4)
- インデックスの数は 36 個(6x6)

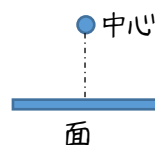
これがヒントです。頑張って作ってみてください。
ひとまずこうなれば…



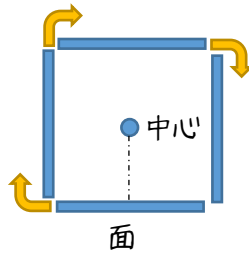
やり方は問いません

一例

さて、やり方の一例ですが『頂点の回転』を利用します。まずオリジナル頂点を 1 面分だけつくっておいて、それを Y 軸中心回転して 4 面分つくります。このときに最初の 1 面は Y 軸から手前側にずらしておきます。



この状態で回転します。



//側面4面

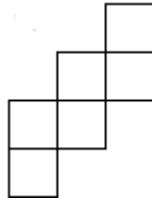
```
for (int j = 0; j < 4; ++j) {
    float angle = (float)j * DX_PI / 2.0f;
    auto m = MGetRotY(angle);
    for (int i = 0; i < vertnum_for_surface; ++i) {
        _vertices[i + vertnum_for_surface*j] = inv[i];
        _vertices[i + vertnum_for_surface * j].pos = VTransform(inv[i].pos, m);
        _vertices[i + vertnum_for_surface * j].norm = VTransformSR(inv[i].norm,
m);
    }
    for (int i = 0; i < b; ++i) {
        _indices[i + j * b] = indices[i] + j * 4;
    }
}
```

こんな風に作ります。後は上蓋と底を作れば OK なんですねあ…

```
float angle = DX_PI / 2.0f;
auto m = MGetRotY(angle);
//上蓋下蓋
for (int j = 4; j < surface_num; ++j) {
    auto m = MGetRotX(angle);
    for (int i = 0; i < vertnum_for_surface; ++i) {
        _vertices[i + vertnum_for_surface * j] = inv[i];
        _vertices[i + vertnum_for_surface * j].pos = VTransformSR(inv[i].pos,
m);
        _vertices[i + vertnum_for_surface * j].norm = VTransformSR(inv[i].norm,
m);
    }
    for (int i = 0; i < b; ++i) {
        _indices[i + j * b] = indices[i] + j * 4;
    }
    angle += DX_PI;
}
```

```
}
```

学生さんが展開図によっては一気に行ける的なヒントを言ってましたねー。



こういうやつ。↑→↑→↑という具合になっています。という事で X 回転 Y 回転を繰り返せばいいかと思ったらうまくいかなかった(´・ω・｀)

よくよく頭の中で展開するとわかりますが、X 回転 Z 回転 Y 回転 X 回転 Z 回転という流れになっています。

このやり方なら一度で一気に定義できます。

//6面設定

```
MATRIX rots(3) = { MGetRotY(DX_PI_F / 2.0f), MGetRotX(DX_PI_F / 2.0f), MGetRotZ(DX_PI_F / 2.0f) };
```

```
for (int i = 1; i < 6; ++i) {
```

```
    auto& rot = rots[i % 3];
```

```
    for (int j = 0; j < _countof(original_verts); ++j) {
```

```
        _vertices(i*_countof(original_verts) + j) = original_verts[j];
```

```
        _vertices(i*_countof(original_verts) + j).pos = VTransform(_vertices((i - 1)*_countof(original_verts) + j).pos, rot);
```

```
        _vertices(i*_countof(original_verts) + j).norm =
```

```
VTransformSR(_vertices((i - 1)*_countof(original_verts) + j).norm, rot);
```

```
    }
```

```
    for (int j = 0; j < _countof(original_indices); ++j) {
```

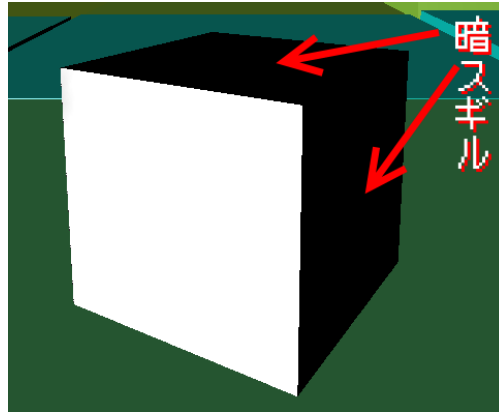
```
        _indices(i*_countof(original_indices) + j) = original_indices[j] + 4*i;
```

```
    }
```

```
}
```

アンビエントとマテリアル

こ↑こ↓まで来てみるとある程度 3D の事が分かってきたかなと思いますがちょっと気に入らない部分があります。



そう、暗い部分が暗すぎるのです。マックロクロスケなのですわー。
こういう時に明るさの下駄を履かせるのがアンビエント(環境光)成分なのですが、

```
SetLightAmbColor(GetColorF(1.0f, 0.0f, 0.0f, 1.0f));  
SetGlobalAmbientLight(GetColorF(1.0f, 1.0f, 0.0f, 1.0f));
```

こんな風にも書いても真っ暗なんです…何故？何故ッソヨー!!!モルゲッソヨー!!
と思ってリファレンスを見ました

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R13N45

こう書いてます。

『逆に、この値を何にしてもマテリアルのアンビエントカラーが真っ黒
だとなにも見た目は変わりません。』

マジすか。初心者向けのようない…そうでない…ような？

ということでマテリアルとは何でしょうか？これは日本語で言うと『表面材質』の事です。
『表面の色』『ざらざら』『つるつる』とかそういうやつ。

先ほどライティングの設定をやりましたが、本来、僕らの目に物の色やら物の形やらが見える
のは、僕らの目に『ライト』から放射された『光』が『物体表面』に『反射』して、その『反射した
光』が『僕らの目』に入ることによって、例えば『赤い本』等と言うものが認識できるようになっ

ています。



で、古典的なマテリアルは、光の種類それぞれに対応するように設定ができています。ところでまだマテリアルってのを設定してないんですが、通常はモデルそのものに定義されています。

ですが今回はプロシージャルに作った立方体。確かにマテリアルは無いですね…ということで適切な関数はないですかねえ…

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R14N11

その名も SetMaterialParam ですね。

アンビエントはそれほど強くないと思います。大体スペキュラは真っ白、ディフューズは背景の色に合わせる(今回は背景黒だけど、まあ、白灰色くらいで)。で、アンビエントはあくまでも『真っ暗にならない』ための措置なので、黒に近い灰色でいいと思います。

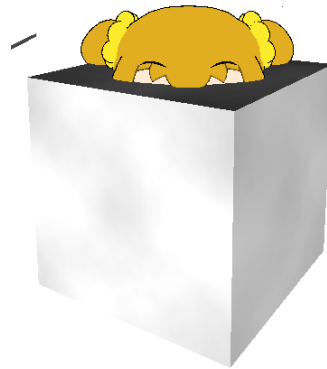
また、Power というのがありますが、これを 0 にしないでください。

```
MATERIALPARAM mp = MATERIALPARAM();  
mp.Ambient = GetColorF(0.2f, 0.2f, 0.2f, 1.f);  
mp.Diffuse = GetColorF(0.75f, 0.75f, 0.75f, 1.f);  
mp.Specular = GetColorF(1.f, 1.f, 1.f, 1.f);  
mp.Emissive = GetColorF(0.2f, 0.2f, 0.2f, 1.0f);  
mp.Power = 10.0f;
```

こういう感じで設定すると



これでなんとなくアンビエントがついたのが…わかるだろう？あと、さっき Power は 0 に写ちゃダメって言いましたが、何故か分かりますか？何故か？



DrawCube は真っ白に。自分で作った頂点は上部が真っ黒に…
良く分からないかもしれないので、スペキュラの計算方法について説明しよう。スペキュラと言うのは鏡面反射による明るさの決定の事。

通常であればきちんと反射ベクトルを計算するのだが、DxLib では簡単にするために『ハーフベクトル』と言うのを用意します。

ちなみに反射ベクトルの計算方法は覚えていますか？覚えていますよね？

$$R = I - 2N(N \cdot L)$$

って感じで求めてました。覚えていますか？で、スペキュラの明るさって奴は、これと視線のベクトルの内積 $\rightarrow \cos \theta$ を求めて、さらにさらに乗数を乗算してやることによって、スペキュラの明るさを決定しています。

$$\text{明るさ} = k(R \cdot E)^n$$

さて、この簡易版がハーフベクトルによるスペキュラ計算だ。DX9 の時はよく使用されていたようだけど、今って使われてるのかな？

ともかく理屈はこうです。

ハーフベクトルを作る

$$H = (L + E)$$

H を正規化する

法線ベクトルと内積

$$H \cdot N$$

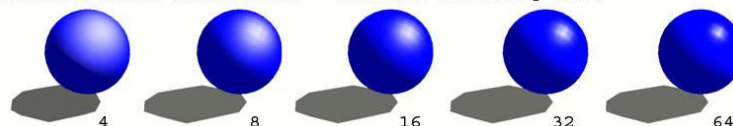
合わせて書くところ

$$(L + E) \cdot N$$

おわり。確かにシンプルですね。ちなみに、ライトベクトルと視線ベクトルからハーフベクトルを作っていますが、理屈はお分かりですか？ベクトルの足し算は平行四辺形状態になるので、足し算結果ベクトルは二つのベクトルの真ん中にあります。どうせ正規化するんだから方向だけ真ん中であればいいという事。

で、恐らくこのハーフベクトルからのスペキュラ計算なんですが、スペキュラと言うのはこのベクトルの内積に対して power つまり〇〇乗したものが明るさとなります。普通に考えたらむっちゃ明るくなりそうですね？でもよく考えてください。正規化済みのベクトルの内積なんて、最大値が 1.0f ですよ？つまり、明るくなるどころか暗くなります。

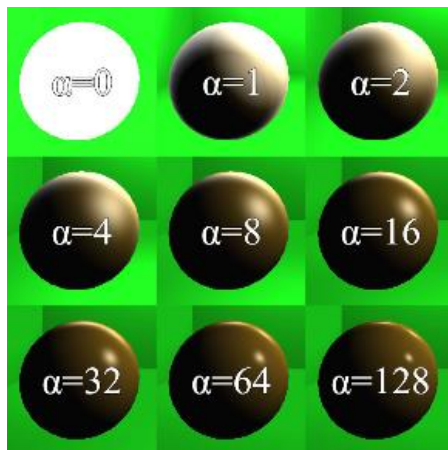
SPECULAR POWER (Irradiance) - constant intensity 0.25



ご覧のように値を上げれば上げるほど白い部分が小さくなります。

この値を上げれば上げるほど、金属感が出てきます。

さて、これを 0 にするとどうなるでしょうか…そう。常に 1 になります。つまり全てが真っ白になっちゃうんですね。気をつけましょう。



閑話①

コーディングは『アホ』と仕事するつもりで

IT 用語で『フルプルーフ』という言葉を知っているかな？これは『顧客』が『とんでもないアホ』であることを想定して UI を作れよという格言や。

で、これは『同僚』にも言える事でな？ゲーム業界は『チーム作業』と言うやろ？チームにもアホはおるんや…おるんやで…厳選なる選考の結果にも関わらずアホはおるんやで…。

例えば口を酸っぱくして言っているシングルトンのな？

- 「代入禁止」
- 「コピーコンストラクタ禁止」

を無視して、アホは代入するしコピーしようとする。

で、皆でバグる。

さて、この場合悪いのはアホでしょうか？コピー可能にした設計でしょうか？

もちろん悪いのはアホです。でも 5 人チームならば少なくとも 1 人はほぼ必ず混じっているアホです。

アホは悪い。しかし被害を受けるのは全員です。アホを責めても仕方ありません。じゃあどうすべきかと言うと、『分かってる奴』が可能な限りアホコードを書かせないように配慮すべきなのです。面倒かもしれませんが、その結果、もっと面倒な事になると思っておいてください。

アホな事を許さないためのコーディングとは

- 可能な限り const を使用する
- private を有効活用する。
- 生ポインタを(絶対に)使用しない
- 定期的に簡易コードレビューをする

です。

俺的コーディング規約？

コーディング規約と言うか、何と言うか…俺的なポリシー？っス。

- 状態遷移に switch~case は使わない

- 可能な限り『分岐』を減らす。減らしたいなあ…。
 - malloc〜free は使わない
 - 配列 new を使わない
 - シングルトン時に『コピー禁止』『代入禁止』を忘れない
 - シングルトンは所詮『グローバル』…それ本当に必要ですか？
 - ライブラリ関数、組み込み関数を使用する際は必ずドキュメントを確認
 - 『分かってない部分』は『分かってない』と潔く認める
 - コメントで誤魔化そうとするな
 - マジックナンバーがないか帰る前に確認しよう
 - ヘッダーで『ヘッダーをインクルード』は極力避ける
 - 『警告』を軽んじない
 - メモリの視点やコンパイル的視点を身につけよう
 - 『型』まわりの理解を深めよう
 - コードは短く、シンプルに
 - 長いコードは書かず、標準ライブラリを活用しよう
 - 『調べる』ための『ひと手間』を惜しまない。自信を持って答えられるようにしよう
 - フールプルーフコーディングを心がけよう
 - バージョン管理システムを使おう
 - コメントは『ヘッダー側』に書こう
 - バグったら『きちんと』デバグを使ってデバグしよう。
 - STL は十分に仕様を把握しておこう
 - 自分のコードには責任を持って!!!自分で『何故そう書いたか』を説明して下さい。
- という事で、今一度、今一度自分のコードを見直してみよう。

C++コーディングガイドライン

ちなみに C++製作者が書いてる C++CoreGuidelines ってのがあるので、英語だけど一度目を通しておこう

<http://isocpp.github.io/CppCoreGuidelines/CppCoreGuidelines>

<https://github.com/isocpp/CppCoreGuidelines>

あと、CoreGuidelineChecker なんてのもあって、

<https://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/mt762841.aspx>

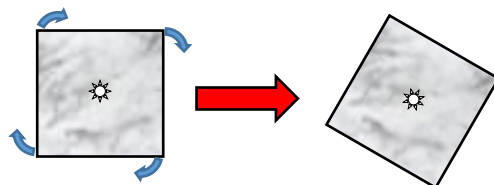
や

<https://qiita.com/TomoyukiAota/items/28b39d77646daa74291a>

に情報が書いてあります。なお、後者の方は『このツールにはいくつか欠点があります』と明記されてありますので、ちょっと評価を待った方がいいのかもしれませんが。

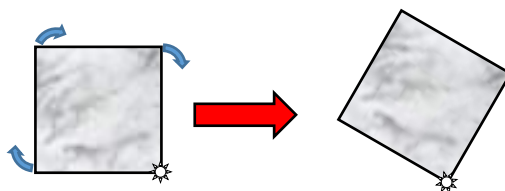
転がしてみよう

転がすという事は回転するという事なのですが……今まで学んできた回転とはこういう風に物体中心の回転でした。



しかし、転がる場合と言うのは立方体を構成する辺のうち、地面に設置している2つの辺のどちらかを中心に回転します。

どちらかと言うと、転がる側に寄ってる辺を中心に回転します。つまり↑の例だと時計回り方



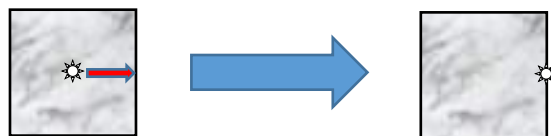
向なら右側。反時計回り方向なら左側へ回転します。

「辺が～」って言うのが非常に難しく思えますが「点」と「軸」が分かれば OK です。も一つ言うと、現在の中心さえ分かれば中心を辺長/2 ぶん移動すれば終わりなので、大した話でもないです。

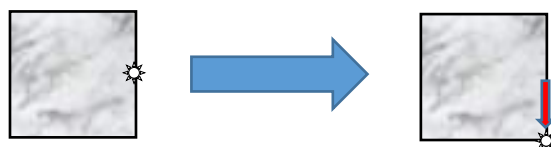
回転方向はともかく、移動方向は意図的であるため分かっています。この辺の解決アイデアは自分で考えてほしいん(若い頭で…)ですが時間も無いし天才頭脳の僕の答えを言います。

中心は転がす前には常にすべての頂点の中間点にあると仮定します。

そこから「進行方向ベクトル」×辺/2 を加算します



次に地面方向に移動させたいので「下ベクトル」×辺/2 を加算



これで求めたい辺と言うか点が出ます。…最終的に最適化はしますが、中間点は全点の平均

にしましょう。

ちなみに「転がる」は rollover ですので

```
void Rollover(float x, float z)
```

的な関数を作りましょう。x,z は-1,0,1 しかとらへんで？

もうちょい細かく言うと

(x,z)=(-1,0),(1,0),(0,-1),(0,1)

にしか動きません。ぶっちゃけ enum Direction でも良かった気もするけどね。

で、一回当たり 90°しか回転しません。これを一回の回転ごとにゆっくりと動かします。
なので

「待機」

「回転開始時」

「回転中」

という3つの状態を遷移すると考えましょう。

ちなみにGeometryクラスのベクタは3Dバージョンを作っておくと楽ができるかも

```
struct Vector3D {  
    Vector3D() : x(0), y(0), z(0) {}  
    Vector3D(T inx, T iny, T inz) : x(inx), y(iny), z(inz) {}  
    T x;  
    T y;  
    T z;  
    void operator+=(const Vector3D<T>& in) {  
        x += in.x;  
        y += in.y;  
        z += in.z;  
    }  
    void operator*=(float scale) {  
        x *= scale;  
        y *= scale;  
        z *= scale;  
    }  
    void operator-=(const Vector3D<T>& in) {
```

```

        x -= in.x;
        y -= in.y;
        z -= in.z;
    }

    Vector3D<int> ToIntVec()const {
        Vector3D<int> v(x, y, z);
        return v;
    }

    Vector3D<float> ToFloatVec()const {
        Vector3D<float> v(x, y, z);
        return v;
    }

    float Length()const {
        return sqrtf(x*x+y*y+z*z);
    }

    Vector3D<float> Normalized()const {
        auto len = Length();
        return Vector3f((float)x / len, (float)y / len, (float)z/len);
    }
};

```

こういうのを作っておいてもいいかな。いや、要らないかも…ぶっちゃけ要らんな!!!

行列を考えよう

今回考慮しなければならない回転は X 軸回転と Z 軸回転のみ。そしてもちろん回転の前に辺を中心に移動せにやらないので、その分の移動行列を T とする。回転行列をそれぞれ R_x , R_z として、T を元の座標に戻す移動行列を T^{-1} とする。

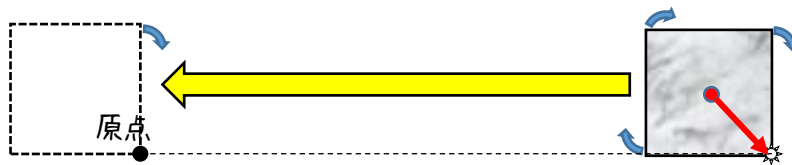
移動行列

まず移動を考えよう…。今回は中心からある程度移動した後の状態からの転がりを考えましょう。



図のように原点からある程度離れた立方体の回転であるならば、その分を考慮して原点に戻さなければなりません。回転後に『中心点再計算』を行っているという事にするのならば

↓の図を見てください。



まず中心を右下へ移動して、さらにそこを原点に持てきたいわけです。
トータルでどれくらいずらせば(移動させれば)良いのでしょうか？

ここまでヒントを言えば分かりますよね？分からんでも試行錯誤しろっ!!
図まで書いてやってんだからさっ!!

いや、もう、ホンマ!2年生の7月なんだからよ!!!自分で考えようよ!!
とりあえず平行移動の関数と回転の関数教えとくからさ!!!

平行移動

MGetTranslate

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R11N16

X 軸中心回転行列

MGetRotX

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R11N17

Z 軸中心回転行列

MGetRotZ

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R11N19

行列乗算

MMult

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R11N25

ベクトルに行列を乗算

VTransform

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R11N12

いやホンマ、ホンマはこの関数も自分で調べてほしい。でも何度言っても!!何度関数を確認し
ると言っても調べないアホがいるみたいなんでリストにしてあげましたよ!!!ホンマムカツ

くわ!!!なんやねん!!!ホンマ!!!!

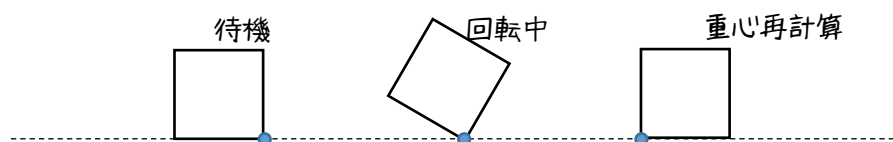
ひとまず、奥側にキューブを転がしていただきます。ちなみに僕はCubeの中にいつものように状態を用意して状態遷移をさせています。

```
void WaitUpdate();//待ち状態
```

```
void RollingUpdate();//転がり中
```

```
void RolledUpdate();//終わった時点で重心再計算
```

この3つの状態を繰り返すわけ。



あ？重心再計算が分からない？

そんなんお前、全部の点(24)の平均を取ればええやんか。え？そんなん重そう？

大丈夫やって



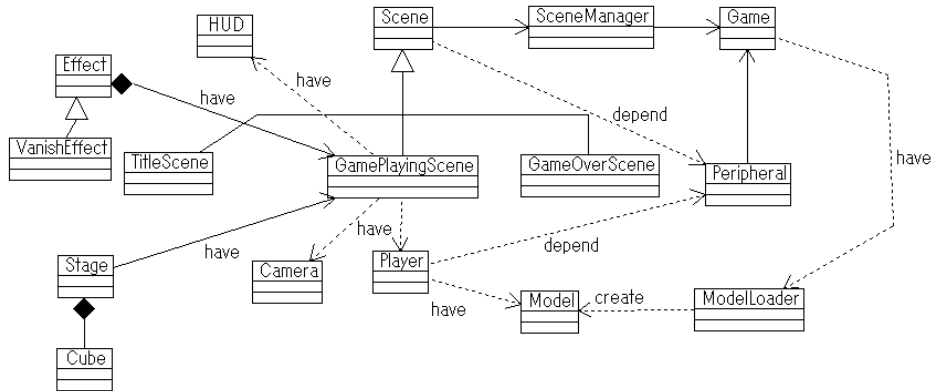
100 個 Debug モードで動かしても処理落ちせんかったんやから大丈夫やろ。気にすんな。

I.Q の実装だけを考えると前後左右への転がりは考えなくてもいいんやけど、余裕あったら XI(sai)にしようと思ってるしね。

「ファクタリング」しよう①

さて、ここで一旦リファクタリングしよう。

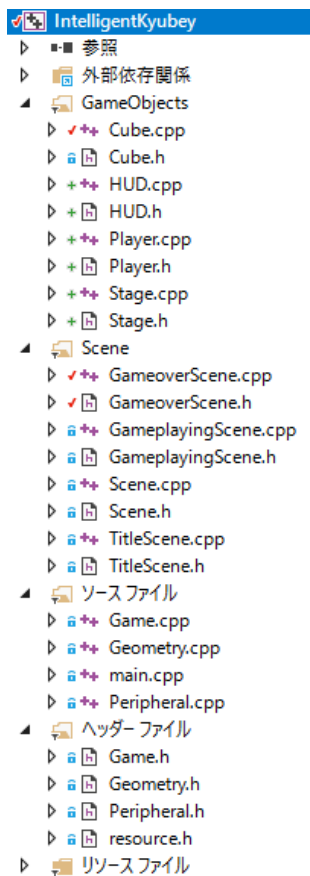
クラス設計



とりあえずこんな感じで(この通りにするとは言っていない…なんとなく流れだけ)。

ちなみに、このツールは前にも紹介したけど UMLMemo ってツールなので、クラスの構成とか考えるのに使ってもらえるといいかなと思います。

そしてプロジェクト構成もフォルダ構成もこんな感じにします。



色々面倒ですが、必要な事なのでやっておきましょう。プログラムのにもファイル的にも整

理をする癖をつけておきましょう。

モデル読み込みストレスを減らす ModelLoader の簡易版を作ろう

今、モデル読み込みめっちゃ重いよね？ストレスだよね？

正直に言うと『ModelLoader』は読み込み時間を減らしません。でも『ストレス』を減らす工夫は作れます。

どういう事かと言うと ModelLoader はシーンに関係なく動作するように作っておきます。Game クラスの持ち物として作ります。

そして、タイトル画面がフェードインしてる間にも裏で読み込みを走らせておきます。メインスレッドは止めないの、基本的には裏でロードしてる事に気づきません。こういう手法は結構使用されます。

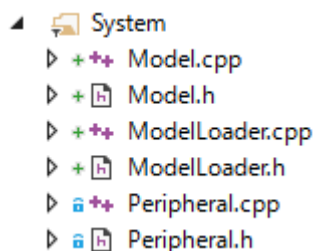
で、ModelLoader なんですが、何をするかと言うと例によってファイル名とハンドルのマップを作ります。二重読み込み防止の意味もあるんですが、ファイル名で指定出来れば裏読みすべきものを事前に登録しておくことが可能になります。

で、とりあえず Game クラスに持たせておくので

```
Game->GetModelLoader()->LoadModel("ファイル名");
```

でモデルを返せるようにします。で、一応モデルクラス Model を返して、モデルハンドルといくつかの変数関数をラップします。

そういう流れで行きましょうか。一応こういうファイル系は File フォルダにまとめておきたいんですが、うーん。Peripheral と同じ流れで System ってフォルダを作ってそこに Peripheral と一緒に放り込みましょう。



Model はひとまずはモデルハンドルを返すだけのクラスにしましょう。あんまり一気にやるのはよろしくない。でも余裕がある人はモデルの情報が扱いやすいようなクラスにしてくだ

さい。

ぼくはこういうインターフェイスにしました。

```
class Model
{
    int _handle;
    bool _loadcompleted;
    Position3f _pos; //現在の座標
    Vector3f _vel; //
    float _direction; //現在の向き(X軸を起点としたY軸中心回転角度)
public:
    Model(int h);
    ~Model();

    ///モデルのハンドルを返す
    ///@return ハンドル
    int GetHandle() const;

    ///ロード済みである
    ///@retval true ロード済み
    ///@retval false ロード中
    bool IsLoadCompleted();

    ///モデルを描画する
    void Draw();

    ///モデルの原点中心Y軸回転する
    ///@param yrot 回転角(ラジアン)
    void RotateY(float yrot);

    ///特定の座標に移動させる
    ///@param pos いるべき座標
    void SetPosition(const Position3f& pos);

    ///特定の座標から移動する
```

```

    ///@param vel 今の座標からのオフセット
    void Move(const Vector3f& vel);
};

```

といった具合ですね。そうすれば呼び出し側(というか Model オブジェクトの持ち主側)のコードは

```

_playermodel->Move(vel);
_playermodel->RotateY(angle);
_playermodel->Draw();

```

といった具合にシンプルになります。で、このモデル自体も Player クラスの持ち物になるのですが…

入力を受け取り、プレイヤーモデルを挙動定義通りに表示するだけですので大して難しくな
いと思います。基本的には Update と Draw があれば事足りると思います。

プレイヤークラス

```

#pragma once
#include<memory>///shared_ptr用
class Peripheral;
class Model;

///プレイヤークラス
class Player
{
private:
    std::shared_ptr<Model> _model;
public:
    Player();
    ~Player();
    ///プレイヤーの状態。プレイヤーモデルの状態を更新
    ///@param p 入力情報
    void Update(const Peripheral& p);

    ///プレイヤーモデルの表示
    void Draw();

    ///プレイヤーモデルがロード済みかどうか
    ///@retval true ロード済み

```

```
    ///@retval false ロード中  
    bool ModelIsLoaded();  
};
```

と言った具合ですね。GamePlayingScene からモデルを直接操作するのではなく、Player に操作させてみましょう。

閑話②

ドローコールは極力減らそう(でも極端にはならないように)

DirectX だろうが OpenGL だろうが描画をするうえで使用されるのが描画系の関数です。だいたい Draw なんとかっていう名前になっています。

もちろんこれは DxLib でも同じで MV1DrawModel や DrawPolygonIndexed などが、それにあたります。

CPU⇄GPU に関する命令には色々ありますが、このドロー系の命令を悪戯に増やすと速度低下の要因になります。

ですから、例えば、キューブを描画する際に

```
for(6 面ぶん){  
    Draw(1 面)  
}
```

などという書き方をするのではなく、6 面分の頂点を事前に用意しておき

```
Draw(6 面分)
```

としたほうが効率が良いのです。こういう大して労力が変わらない部分であれば、極力ドローコール回数が減るようにしてください。

ところでカッコで『極端にならないように』と書きましたが、プログラマと言う人は思い込みが激しくドローコールを減らすために全てを犠牲にしようとする人がいます。何が犠牲になるかと言うと可読性や時間などですね。

ドローコールが増えると確かに描画コストが増えてしまうのですが、そこはゲームプログラミング…『ボトルネック』がそこにあるわけではありません。例えばものごっつい時間をかけてドローコールを減らして頑張ったんだが、プログラムの処理落ちの原因が経路探索にあったならば、それは労力に見合わない頑張りという事になります。

例えば『インスタンスング』を利用するとドローコールを減らすことができますが、それは効率が格段に良くなることが期待されるもしくは、大量のオブジェクト描画がボトルネックになっていると確認できるときにしましょう。

あとさっきの例のようにドローコール減らしが簡単な場合な場合はどしどし減らしましょう。なんでもそうですが極端は良くないです。

また、マテリアルの変更などが行われると一緒にドローができないため、その場合にも `MV1DrawModel` の中で『隠れドローコール』が増えます。これはプログラムで対処するよりもモデルの作り方を変えたほうが賢明ですね(テクスチャをまとめてしまう…メッシュをまとめてしまう)。

ゲームルール部分を作っていこう

さて、キューブを転がすだけではゲームになりません。『キューブが時間で自動で転がり、Zキーがなんかでプレイヤーが地面にマーキングして、再びZキーが何かでマーキング解除(この時、上にキューブがあればそれを消す)』などのルールを実装していきます。

で、ゲームの設計に関わるヒントの話ですが、こういうゲームのルール(自分がゲームにさせたいこと)を**まずは文章化**してください。

頭の中にある『ぼくがかんがえたさいきょうのゲーム』の時点ではほぼ完成不可能だし何かから手を付けていれい分かりません。

アイデアの外部化(要は文章化することで他人の目に見える形にする)をすることで、少しは客観的に見るができます。この時点で矛盾が見つかったり、もしくはゲームの概要がよりはっきりしてくるため、これを面倒がらずにやってください。

また、これを誰かほかの人に見せてください。この場合に『説明が伝わりづらいな』と思ったら図や絵を用いてください。その過程で、自分の中のアイデアもよりしつかりしていきます。

勘違いクリエイターにありがちなのはアイデアを自分の頭の中のみに置いておいて全然実現させず、後に誰かが作った時に『俺なんてずっと前に考えてたよ』とか言うわけです。

惨めですね。ある意味その証拠を残すためにも外部化していきましょう。

で、文章にしたら箇条書きにまとめていってください(アイデアを細分化してください)

ルール

さて、今回の IQ の仕様に関してですが、仕様を箇条書きにすると

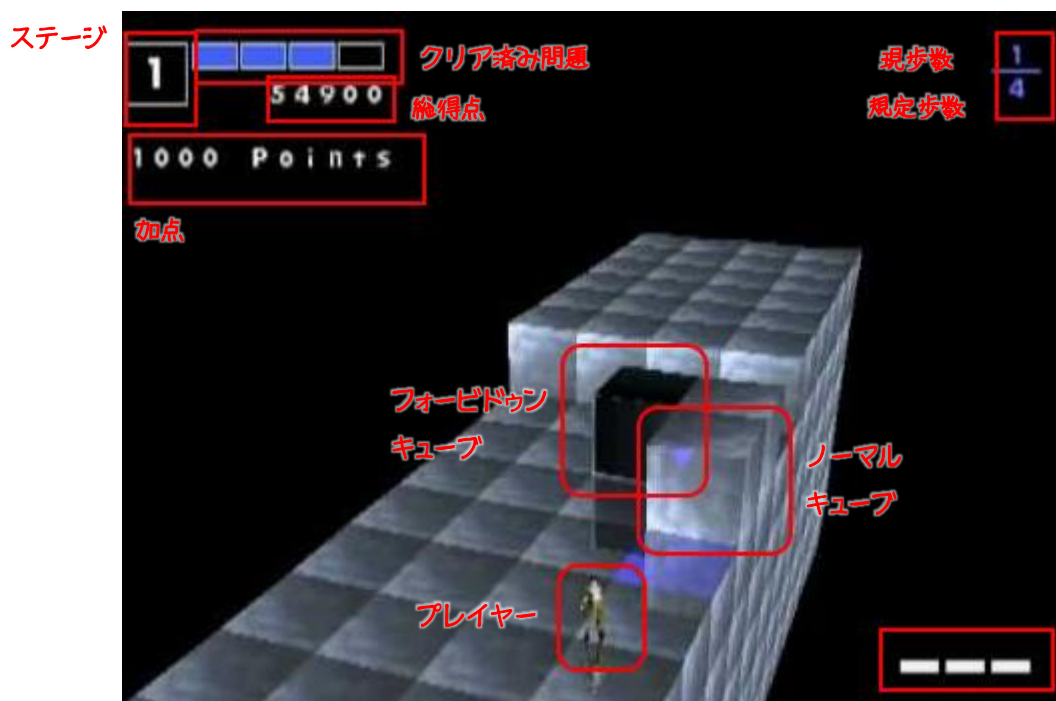
- プレイヤーはマス(キューブと同形状)の上を移動できる
- マスからキューブが一定列出現し、一定時間ごとにキューブが手前に転がる
- 手前に転がってステージの端にくるとそこからキューブは落下する
- 手前に転がるキューブに潰されても死なないがステージが 1 列ずつ崩壊する
- プレイヤーが潰された場合は残ったキューブは早送りでステージ端に落とされる
- ↑のとき後述するルールによりペナルティがある。さらにその問題はやりなおし。
- 崩壊は手前側から崩壊する
- プレイヤーは自分のいる位置の真下のマス(キューブと同形状)をマーキングできる
- ↑のときのマーキングエフェクトはマスの上部の色が青に変わる
- マーキングした部分はあとから『解除』することができる。この時赤に変わる
- 赤マーキングしたマス上にキューブが乗った状態で『解除』するとそのキューブが消える
- マーキングとマーキング解除は同じボタン(PS では○)で行う
- ↑の仕様により一度にマーキングできる箇所は 1 か所だけである
- キューブの種類は 3 種類あるが、全てに対して『消す』操作は可能である
- 『ノーマルキューブ』は消せるし全て消すことが目的である。
- 『フォービドゥンキューブ』を消してはいけない。
- フォービドゥンキューブを消すとステージが 1 列崩壊する
- ノーマルキューブやアドバンテージキューブが 3 つ落下するごとに 1 列崩壊する
- もちろん自分が潰された際に早送りで落とされるキューブはカウント対象である
- フォービドゥンキューブが落下しても通常ならステージ崩壊に影響は与えない
- しかし、自分が潰された場合はフォービドゥンキューブもカウント対象である
- プレイヤーがステージの崩壊に巻き込まれるとゲームオーバー
- 『アドバンテージキューブ』を消すと緑色のマーキングが残る
- ↑の状態でもボタン(PS では△)を押す事でそこを中心に 9 マス赤マーキングされる
- 既にマーク済みの部分は↑のアドバンテージマークの影響を受けない
- □ボタンを押す事でキューブの転がりを早送りできる
- ノーマルキューブ消し 100 点、アドバンテージキューブ消し 200 点
- 9 マスマーキングで消すと↑の倍が加点される
- 問題は 1 ステージ当たり 1 定数(ここでは 4 とする)
- ステージクリア毎に残りの列数×1000 点加点される
- 各問題には『規定歩数(模範歩数)』があり、『歩数』とは転がり回数である
- 規定歩数を越えてクリアすると GREAT の称号がもらえる(2000 点)
- 規定歩数通りにクリアすると PERFECT の称号が貰える(5000 点)

- 規定歩数未満でクリアすると EXCELLENT!の称号が貰える(15000 点)

と、箇条書きにすると、やたら多くなってしまう事が…わかるだろう？書くだけで疲れますな。でも少なくともここまで細かくしないとゲームとして実現しないことも…わかるだろう？ここまで書いても穴がある可能性が高い…これが仕様なのだ。

でも一旦書き出しておけば、あとはこれを実装するだけ…まあ、うんざりするほど多いけど、やらざるを得ない…。

ひとまず既にある DrawCube は消してしましましょう。一応ゲーム画面はこうなっています。



まずはこの体裁を整えていきましょう。ちなみに土台の厚みは5キューブ分に見えます。最初のステージでは 4x6 くらいの土台にキューブが盛り上がってきて 4x2 くらいの問題から出題されます。

ひとまず最初の問題はチュートリアル的に

□◇□■

□□□□

こんな感じです。□がノーマル。■がフォービドゥン。◇がアドバンテージという事になっています。

とりあえず今は効率の事など考えずに素直に配置してみましょう。

マルチスレッドの強い味方

ところで、俺の知らんうちに、マルチスレッドには強い味方が増えているようです。昔は `_beginthread` でひーひー言ってたんですが、もうそんなものに悩まされることも少なくなるね!(なくなるとは言っていない)

`_beginthread` とかで作ると、スレッドセーフに作っていくのがクッソ大変だったんよ…でも今はそうじゃない。そうじゃないんだ!!ありがたい…本当にありがたい。`_beginthread` と `CreateSemaphore` の組み合わせとか、考案者をブチ殺したくなるほど面倒だったんだよー。

マルチスレッドを使うために便利なテンプレートクラスが

- `std::thread`
- `std::atomic`
- `std::mutex`
- `std::condition_variable`

これらなんですけどね? 昔はこれと同じ仕組みをする奴を自分で作ってたんだわー。なんであの…あの…月 600 時間煉獄に入る前に何故存在しなかったんですかねえ…。

まあぶっちゃけ現代では、どっちみち GPU 側のマルチスレッド地獄が待っているのですがね? それへの布石として通常のマルチスレに足を踏み入れるのも良いかと思います。